おおとり会だより

平成８年４月１５日発行
静岡女子短期大学
静岡女子大学
同窓会　おおとり会

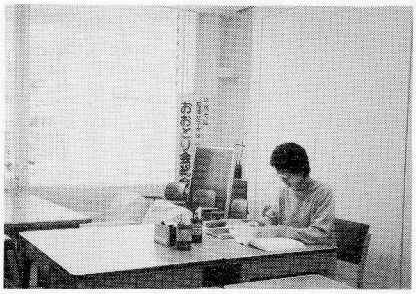
新しくなった おおとり会室

そしてモニュメント建設実現にむけてスタート

おおとり会会長　牛木　琴

新年度を迎えて、卒業・入学・転出などで各々、様々変化のあった方も一段落して、爽やかな季節の中での毎日をお過ごしの事と存じます。

かつて、皆様に著名をお願いして県立大学の中に確保した同窓会の拠点、おおとり会室が新しいクラブ棟に移転致しました。旧図書館の、東側の窓からは富士山が、西側の窓からは静岡の市街が一望のもとに眺められた部屋に比べますと、スペースも縮小され、眺望もききませんが、事務本位で考えますと充分過ぎる程です。でも拘りの、唯一残された女子大の建物であり、同窓会の存在を示す象徴がなくなってしまう虚しさは譬えようもなく、これに替るものの必要が切望されます、一昨年総会に関西在住の方の代表がモニュメント建立の提言がありましたが、是非共具体的に推進させたいと願う次第であります。



昨年、静岡県の関西事務所が大阪に開かれ、その披露パーティーが七月下旬、大阪ロイヤルホテルで、石川静岡県知事主催でありました。そこで、関西支部の役員と、元学長森先生始め関西在住の先生方にご列席をお願いして、おおとり会の事、モニュメント建立の事のアピールをしていただきました。そのすぐ後、八月におおとり会の役員（会長副会長と・大・短代表者二名）が知事宅を訪問して、卒業生の母校への思いと、モニュメントに託す心情を説明して参りました。

知事も承認の形で、大学事務局と話し合いをとの事でした。星学長も森事務局長もこの事には深いご理解があり、県立大の十周年記念行事の中に組み入れてとの案を指示して下さっておられます。この事（モニュメント）は、関西支部の働きかけが大きな起因となっており、彫刻のサンプル写真と予算の提示がありました。

ごく一部の人の思いつきでなく、会員の皆様の切なる願いの結集としてまとめたいと願っております。昨年、おおとり会運営の通信費依頼の振込用紙を同封致しました処、多勢の方からの振込みと共に、同窓会への熱きエールを沢山お寄せいただきましたので、その一部を別紙紹介させて頂きました。モニュメント、建設費用は、皆様からお寄せいただいている基金の内から計上したいと考えておりますが、忘れてた方や、充実したものにと思われる方の更なるご協力をお願いしたくて今年も用紙を同封させて頂きました。替同のご意見や著名だけでも結構でございます。各科から推選された、推進委員をどうぞ、激励して下さいます様、お願い申し上げます。

通信費寄付のお礼

おおとり会通信費を皆様にお願いしましたところ多勢の方がお寄せ下さいました本当にありがとうございました。

お寄せ下さった方々のお名前は別紙の通りでございます。

今後ともよろしくお願い致します。

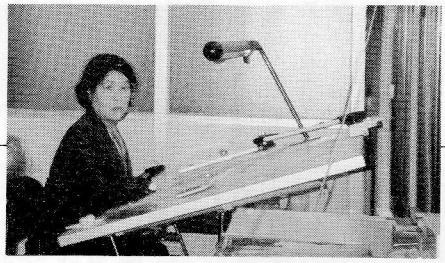
変わり種

一級建築士　佐藤昌子（短大英文二回）

雪国に雪が降り始めると落ちつかなくなる。スキーシーズンは短いのだ。スキーしないと春が来ない、などと言ってここ二十年余毎年滑り続けている。四年前誘われるままに検定テストを受けたら二級に合格してしまった。あれはまぐれだったとしか思えないのだが。「次は1級ね」とスキー仲間に言われるけれど、今のところその気は無い。のんびり楽しんでいれば結構。「1級と名のつくものは、日本酒と建築士だけでいいや」と呟いている。

短大の「女の園」を卒業して数年後、一念発起して建築設計の世界に飛び込んだこと、我ながら驚くほどの百八十度転回であったが、若さと熱意で夢中であった。当時女性の建築士は非常に少なく、苦い思いも多く経験した。デザインスクール卒後就職内定していた設計事務所から、内定取消の通知を受け、夕暮れの日本橋から有楽町まで、一人、人目も憚らず大声で泣きながら歩いた悔しさも今では懐かしい。取消の理由が・・女性であること、少し年齢が多いこと・・・であった。

一級建築士の試験に合格した時は自宅の床にでんぐり返って喜んだ。受験までのアフター・ファイヴの勉強は実にしんどかったけれど、一回で合格出来た嬉しさで吹き飛んでしまった。



テレビや映画に出てくる美人建築士はカッコ良くきれいごとばかりだが、飛んでもない。髪振り乱しての連日の残業、騒々しい現場での打合せと監理、監督との言い争い等々、男性に甘える事など私の辞書には無かった。しかし創る喜びの充実感が支えとなり、やり甲斐のある面白い仕事なのだ。さっぱりした男性ばかりの世界も、私、大好きであった。時には涙を隠し、時には冗談の飛ばし合いをしながら、職場を変えること五回、三十余年勤めた。

趣味として絵を描いているが、設計製図に明け暮れた感覚からか、直線をどうしても入れたくなることなど一種の職業病かも知れない。

四年前にフリーランスになってから、「英語を今一度」と思い立ち、忘れ去ったヴォキャブラリーの一つでも多くおびき寄せようと、自分に課している最近である。英語の私の実力は只今、番外級である。

梅一輪

いけばな古流松寿会教授　田中愛子（短大国文十回）

梅の花開く頃になりますと毎年、故岸得蔵先生のお姿が想い出されます。

“梅一輪一輪ほどの暖かさ”と、両手を頭の後に組み大きな回転椅子をまわし乍らおっしゃいました。そして『人々はいつまで梅の花のように清く美しくいるのだろうか？内山君！』講義と講義の間の十分間の休憩時間での研究室でのお話しでした。

わが家の床の間の軸を「梅一朶香」から「雪破香」に掛けかえている時でした。後輩の堀内さんよりお電話いただき『原稿を書いていただけませんか』『簡単な事でしたら』と、深くも考えずに返事をしてしまったのです。

私は幼い頃より母に茶を習い、花を習い、書を習い全く自由性のない平凡な道を歩んで来ましたが現在では母の古からのお弟子さん方に導かれ支えられ、又若いお弟子さん方に囲まれ協力を受け日々仕事に追われ母の手足になれる多忙な人生となってしまいました。

母の教えは「真実一路」「実る程頭を下げよ」。母の存在は九十パーセントが師匠、残る十パーセントが母親でしょうか。しかし研究室二年間の副手時代いろいろと原稿の下書きのお手伝いなどのお蔭を持ちまして今日では、当社中内の会報を年一回ですが発行する事が私の楽しみとなって居ります。

今、縁側にて原稿を書いています。庭の木々に春を告げる芽ぶきが…。そして梅の古木に掛けた小さな籠の中のミカンを見つけては小島たちが遊びに来ます。

人々はこんなささやかな事に喜びを感じて生きてゆくものだと思います。

一生感動。春の音が聞えて来ます。やさしく、あたたかく、楽しく人々にも語りかけましょう。

如月十八日記

大正琴と共に歩む岡田てる子さんを訪ねて

琴静流宗家　岡田豊礼（短大食物六回）

澄んだ音色の大正琴のひびき、ここは琴静流の教室。ソプラノ、アルト、ベースの琴の見事な合奏に十二名の方が熱心に取り組んでいた。

岡田さんは昭和五十七年静岡市内の公民館の寿大学で教えはじめ、昭和五十九年豊和会結成、増えた会員をまとめ昭和六十二年琴静流を創立。現在会員数約千名、教室数70余、人の和を大切にボランティア活動を会の中心におき月3回は福祉施設への慰問。アメリカ、フランス、台湾、シンガポールなど海外への親善演奏も数多く、毎年チャリティ演奏会を開き収益金を市へ寄贈するなど幅広く活躍され、平成四年には静岡市芸術文化奨励賞を受賞されている。

「今迄続けられたのはまず大正琴が大好きであること、私自身が健康であり家族も健康であったこと。おけいこを通じて知り合った多くの人達とのやさしい輪に支えられたこと」とにっこりされる岡田さん。会員の中には同窓生の芝口和子さん（短六食）芦川容子さん（同）川平英子さん（短十二食）も師範の資格を得て岡田さんに協力を惜しまないという。川平さんは「家元のすばらしい魅力にひかれて八年間続けています。慰問ボランティアに行った先でアンコールの拍手を頂いた時の至福の喜びが忘れられず、今後も大正琴は私の生きがいですよ」と楽しそうに話してくれた。

岡田さんは毎日各教室での指導が終ると夜は五線譜から大正琴の演奏譜にアレンジしながらの楽譜作りに没頭する毎日とか。それでも家事の手ぬきはしないように心掛けていますよと仰言る。岡田さんの話ぶりや教室の雰囲気からとても暖かな人柄で会員にしたわれている様子が伺え、又それが会の発展の大きな要素になっていてひとすじの道を行く女性の静かな強さとやさしさに深く感動した。

今秋も十月十三日静岡市民文化会館でチャリティ演奏会が開かれるという。川平さんは「家元はアイディアに秀れていて異った分野の方々との協演など毎年楽しい会が開かれますよ」と教えてくれた。期待して出掛けたいと思う。（平野記）

人生のターニングポイント

――夢織工房主宰――

天野恵美子（短大被服九回）

短大を卒業して、三十五年、まだ田園風景の残る北安東の校舎に通った二年間、「一生学び続けてください。」と云われた卒業式、この原稿を書きながら、なつかしく思い出しています。私自身もこの春、三男の大学卒業で子育てのすべてが終ります。

十年前、夫の突然の死という事情から仕事を持つことになりました。夢だと思っていた染織工房を八年前にこの富士川の地に開くことが出来ましたが、女一人で起業する事の大変さ継続しながら発展させていくことの難しさも味わいました。

「趣味と実益、いいですね。」と云われている時には考えもしなかった事の連続です、しかし、生きてゆく目標もでき、まわりの人々に支えられながら、人と人との出会いを楽しみ出会いの輪が広がっていくのを感じるとき、この仕事を始めて良かったと思います。

工房は、十五、六人の入れるスペースがありますので、四年前から当町在住の詩人、小川アンナさんを囲んでのおしゃべりが楽しい読書会、またいろいろな仲間の集会の場所にもなっています、また、昨年からは「知的好奇心」「体感」などをテーマに提案型の企画展を二ケ月に一度開き、手仕事をする方々の作品を展示即売したり、くらしを楽しむためのヒントなども提供しています。

今、時代が変わりつつある中で、生活を楽しむ時間が増えて来ました。この小さな町の小さな工房にも企画展のたびに、多くの方々がおいでくださいます、とても、うれしく次の展示会への夢がふくらみます。

人生のターニングポイントを過ぎた残りのもう一人生を、この小さな町の自然の中で、草木がくれるさまざまな色を糸や布に移しながら楽しんでいます。

生かされている事に、感謝しながら。

淳君からジュン・スズキ氏へ

八木文子（短大食物十回）

高校時代から素晴しい声を披露して有名だった淳君は、芸大に進み、やがて掛川市にとって伊藤京子さんにつぐ声楽家になるものと、私達は楽しみにしていました。しかし二十数年の空白を得て再会した彼は、掛川駅前に二基の見事なモニュメントを制作した彫刻家としてでありました。あの狭き門を勝ち抜いて芸大に入った人がなぜ中退をというような素朴な疑問を持ち続けていた私にとって、以後の彼の活動は答そのものの驚きでした。

ナホトカからシベリア経由で冒険旅行のつもりで渡ったヨーロッパ、それが二十年余にも暮すことになるとはご本人も思わなかったとのこと。国立リュッセルドルフ芸術学院でヨーゼスボイスに師事し、学び、異なるジャンルの最高の芸術家たちとの交りの中で、結実していった創造芸術家としての評価そしてカイザースヴェルター賞受賞。腰をすえて暮したルッセルドルフやニューヨークの生活があったからこそ見えてきた「日本」と「日本人」。

それら全てが現在の天才プールの活動に開花したのだろうと思います。

「創造というエネルギーを持った人は全て、天才である」というジュン氏のメッセージは凡人にはすごく応える。これでいいと思わずに前向きに生きなければダメだと言う。話をするだけでパワーがおし寄せてくるような希有な人でもあります。マンハッタンの生活があったから、近くの沢でとれるしじみの朝食が幸せであるという。

皆様も満月の夜、もしくはいつでも掛川郊外の「天才空港」に一度着陸してみて下さい。きっと何かが見えてくるのではないでしょうか。

おおとり会総会

平成七年六月四日県立大学小講堂で来賓の諸先生のご出席と百七名の会員の参加により開催されました。平成六年度の活動報告、決算報告などの総会議事が承認されたのち、三月にご退官された高嶋先生、中田先生、江崎先生、上柳先生に同総会より記念品贈呈がありました。

続いて講演会に移り「退学のススメ」と題して掛川市在住、天才プール主宰のジュン、スズキ氏が登場、ユニークないでたちと強烈な個性あふれる語り口に全員カルチャーショックを受けました。自然を大切に創造の世界に生きている氏から、日常文化を伝える役目を持った女性の大事な生き方を考えさせられました。

お昼は懇親会で旧交を暖めた一日でした。

―剣祭に参加して―

藤田祐子（大学国文七回）

静鉄草薙駅から、坂道をゆっくり登って行く。十数年前、茶畑ばかりの景色と比べると、家がずいぶん建ち並んでいる。

濃い茶色のレンガ造りの正門からは、賑やかな音楽や声が聞こえてくる。学生たちの活気ある空気が伝わって来るようだ。何となく、若返った気がする。華やいだ気持ちになる。

正面の階段を上った中ほどに、おおとり会の模擬店のテントがある。学生達が、毎年準備してくれる。

スチールの机の上に、卓上コンロを設置して、おでんの大鍋をのせる。おいしそうな香りが漂ってくる。他に、手造りの梅干し、花豆の煮豆、林檎ジャム、マドレーヌ、プリッツなどの洋焼菓子、会員の皆さんが、造って下さった品ばかりだ。

昨年お手伝いした時も、たくさんの手造りの品が集まった。学生達に大人気で、売れ行きは、上々だった。

今年も覚えていてくれた学生が来てくれたり、手造りジャムを指定して買に来てくれた。中には、『おおとり会』って何ですか。」と聞く学生もいて、返事に困った。一年に一度、県立大の中に生き続けている「静岡女子大学」を見つけるためにも、是非、来年も剣祭の手伝いに参加したいと思う。

お知らせ

県立大学社会人聴講生制度について

県立大学では平成八年度も社会人聴講生の制度を4月より開設。前期講座の募集はすでに終了したが後期講座分は八月上旬に募集予定。各学部興味深い講座が開かれる。新しい発見を求めて生涯学習の折角のチャンスを生かしたら如何だろうか。

ただし聴講生制度では単位取得は出来ない。資料送付など詳細は県立大学学生課（電）054―264―5008まで。

編集後記

春の訪れと共に今年も「おおとり会だより」を皆様のもとにお届け致します。

私たちの心の原点である母校をこの便りが甦らせ、各方面でご活躍の諸姉の様子をご紹介することによって皆様方が旧交を温め合い、共に頑張ろうという意欲を湧き立たせて頂ければ幸いでございます。特に県外在住の方々からは期待の声が高く、私たち編集委員一同、母校とのパイプ役の使命を痛感し励みとさせて頂いています。一人でも多くの方のご寄稿を心よりお待ち致しております。